



角川文庫

—2586—

違っているかしら

森村桂



角川書店



角 川 文 庫

違っているかしら

昭和四十四年六月三十日 初版発行
昭和四十七年七月三十日 十二版発行

定価は、帯・カバー
に明記してあります

著 者 森 もり 村 むら 桂 かつら

発 行 者 角 川 源 義

印 刷 者 橋 本 伝 四 郎
市 川 市 湊 新 田 六 十 一

発 行 所 東京都千代田区富士見二ノ十三 株式 かど 角 かわ 川 しよ 書 てん 店
一〇二 〇八 会社

電話東京(265)セニ(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan 新興印刷・本間製本

0193-128702-0946(0)

違ってゐるかしら

森 村 桂



角川文庫

2586

目次

I 会社ってなんだろう

三つ子の魂

国文科女子お断り

とんちんかん問答

生れて二度目の試験場

小手調べの入社試験

これが新聞社？

社長さんの秘密

学習院がハチ合わせ

新薬の発明者に

八 四 九 三 六 三 〇 四 四 九

女子大生でなければ“女子”に非ず

あらゆるコネを総動員

給料よりも入ること

落ちて声なし

親友コダとの会話

舞込んだ脅迫状

憧れの出版社に決る

Ⅱ 私は“社会人”

新米社員の第一日

しつこい女の好奇心

初仕事は映画批評

こんなはずじゃない

通して下さい卒業論文

四 六 五 三 六 二 八

三 七 二 一 六 一 三

社内のモヤモヤ空気

プラン、原稿すべて採用

チャンス到来！

正社員になれると思えば

キャップの名は「殺し屋の鉄」

社長に直接談判

ああ、わが百十一人の推薦者

乾杯しよう、川瀬君

空しい卒業謝恩会

川瀬君の本音

就職よ、お前は一体なにものだ

Ⅲ 私のモノサシは違う

なんとか、社長に会おう

二〇

二七

二七

二八

二八

二五

二七

二六

二七

二四

二九

一八

むずかしいミソ汁の味
 社長が牛乳をくれた
 いざ実力の見せどころ
 異名「コワシヤのケイ」
 テンカンと脚気と
 太陽は真上にきた
 ここだけが社会じゃない
 社長、すみません
 私は大編集長の後継者
 未知の世界を歩きたい
 さて、これから――

解説

秋山ちえ子

二七一

一九〇
 一九
 二〇四
 二二
 二三
 二六
 二七
 二四三
 二四
 二五
 二六三

違っているかしら

Ⅰ 会社ってなんだろう

三つ子の魂

会社に勤めようなどという気を起こしたのが、そもそもの間違いのはじめだったのかも知れない。三つ子の魂がどうのこうのというが、そのデンでいくと、私は決して、会社に勤めるなどということをしてはならないはずだった。

小さい時、どうしても不思議でなかったこと、それは、よく友だちやいとこのお父さんが、「会社へ行く」ということだった。

「会社ってどういうところ？」

「大きなビルディングなんだよ」

「そこで何するの？」

「お仕事するんだ」

「なんのお仕事？」

「そうだね、書いたりね」

「じゃ、うちのお父ちゃんと同じこと？」

「うん、計算したりもするんだよ」

「じゃ、算数の先生と同じこと？」

「生徒はいないんだ。えらい人や、同じぐらいの人や、いっぱいいるんだ」

「みんな、何してるの」

「そうだね、書いたり、ハンコ押したり、計算したり……」

「なんで？」

「おじさんは、バスの会社につとめてるんだよ」

「運転手さん？」

「いや、運転はしないんだ」

何かなんだかわからない。バスの会社なら、運転手と車掌がいればいいはずだし、電車の会社なら、キップを売る人、切る人、ピーッと笛を鳴らす人がいればすむ。キャラメルのは、会社に売って、それを売る人があればいい。キャラメルを作る職人、それに売って、それを売る人があればいい。

「会社」というものは、どういふところなのだろう。

それらの仕事とは別に、会社というビルディングがあつて、「会社」という名のもとに、何やら、書いたり、計算したり、いっぱい人がいるという。いったい、彼らが何のために、そんなことをしているのか、わからなかった。ずいぶん多くのおとなたちが、無駄なことをしに行ってるもの

だなあ、と思っていた。

あいにく父は、小説家だったから、かなりおそくまで、“会社”なるものを、私は理解しないでした。それに、私たちの小さかったころは、会社員になりたいなんて、希望をもっていた子どもはいなかった。軍人になりたい、バスの運転手になりたい、お菓子屋さんになりたい、お姫さまになりたい、そんな夢だった。そして私の持った夢、それは、父の話してくれた天国にいちばん近い土人の島へ行って、土人の子供たちとヤシの実の水を飲んだり、丸木舟に乗って魚つりをしたりしてくらすことだった。会社などという、不可解なところを、だれも、憧れたりもしなかったのだ。

しかし、この世の中、そう、幼い夢が叶^{かな}うワケではない。それを生涯の仕事と思わなくとも、“会社に入る”ということは、かなり安全な道である。特別何の才能ももたない者であってみれば、なおのこと、何とか大学を出て、どっかの会社、それもなるべく大きな会社に、もぐりこみたいのが人情だろう。

昭和三十六年の秋、私も翌年の卒業をひかえて、それを真剣に考えるハメとなった。実際のところ、それを生涯の仕事と思ったわけではない。そんなに思いつめるほど、したかったわけでも、しなければならなかったわけでもない。私には、会社に勤めるというよりほかに、もっとしたいことが、しなければならぬことが、あるような気がしていた。

つい昨日まで、私には没頭している仕事があった。施設出身者たちのアフターケアセンター、私はその一員だった。孤児たちは中学卒業と同時に、それまで育った施設を出なければならぬ。

そのほとんどは住み込みで働くのだが、勤め先がつぶれ、あるいはいやになり、病気になったところで、もはや、まえの施設にもどってくることは出来ない。中学卒業以上の人は世話を引受けないきまりなのだ。帰る家も、頼る兄弟もなく、少年たちはその心細さと身軽さのために、ちょっと不満が出来ればその勤め先をやめ、転々と職をかえ、三十歳になっても、アパート一部屋借りられない。あるいは悪い友だちが出来て堕ちて行く。アフターケアセンターとは「それではいけない。少年たちの帰る家をつくろう。病気ならば寝かせてやり、職がなければ職を探してやろう。そしてもしよそに行きたくなければ、センターの中でも働けるようにしよう」と、ある神学校の先生が、その職をなげうって、施設出身者たちを集めて数年がかりでつくりあげた、そのセンターのことである。

今ではそのセンターは三十人の少年たちを泊め、洋服屋さん、工場の下請け、それに廃品回収業で資金をつくり、日本中からたよってくる施設出身者たちの就職や病気の世話をしている。

大学に入ってから、手芸品を集めてバザーを開き、将来孤児院をたてようという会を作り、はりきっていた私は、今年の正月、このことが報道された週刊誌を読んで、このセンターを訪れた。センターのリーダーは、男の子の方は問題ないけれど、女子の奉仕者がいないので、女の子を泊めることが出来ないため、みすみす堕ちて行く女子を救うことが出来ない。それにもし、女子部も出来れば、日本で唯一のセンターになるから、財団法人としてみとめられて、都から補助もくるようになる。山形から松本さん、大阪から近田さんという、やはり若い女性が手伝いたいといっているが、その人たちと一緒に、女子部を作ってくれないかといった。

思ってもいないことだった。私は家庭教師のアルバイト、文芸部や演劇部、それに、この手芸バザーの会で手いっぱいだし、ずっと将来ならともかく、人を助けるなどということとは、二年前父が死んでなおさら貧乏になってしまった今、精神的にも物質的にも、むりであった。しかし、そのリーダーの熱心さ、それに松本さん、近田さんに会って、私は心を動かされた。二人とも、やる気と身体より他に持たない人たちだった。

幼い頃、気の毒な孤児の物語を読んで涙を流し、将来大きくなってえらくなったり、金持になったら、こういう人たちを救おうと思っていた。そして、今の私も、その幼い日の心はまだ残っている。だから、将来孤児院を建てるための資金づくりを手芸バザーによってしているのだ。けれど、この時私は思った。十年先、二十年先のことなんて、約束出来ない。えらくもお金持にもなれないかも知れないし、なれたときは、めんどくさくなったり、欲ばりになってるかもしれないもの。困ってる人はいま現にいるのだ。私はこの手芸バザーの会をつづけながら、センターの女子部をつくる一員になろうと決心した。私の家にほど近い四帖半のアパートを借りて、女子部は発足した。

少女たちがやってきた。職場をとび出して来た娘もいれば、病気の娘もいた。なかには、私たちの手におえない女の子もいた。しかし、三人は一生懸命に働いた。どこから資金が出るわけでもない。アパート代から食費、足代、医者代、すべて自分たちで働かねばならなかった。松本さん、近田さん、彼女たちが生活するだけでさえ、お金はかかる。だから二人は、夜も働きに行かねばならなかったし、私もアルバイトをふやさなければならなかった。とくに、彼女たち二人の

働きは目覚ましかった。夏の暑いさかり、上からどんどん落ちてくる廃品の山の中で、汗とごみだらけになりながら、気にもせず先にたって働いていた。私はおもに少女たちの職さがしをした。そんなみんなの働きの、実る日がやって来た。ついこの間、財団法人になることがきまったのである。翌日、私たち女子部は解散した。これで仕事が終わったのではない。これからであった。しかし、私と松本さんは知っていた。二十五歳の近田さんが、もう一度発作を起こしたら命にかかわるということ。

近田さんは、ここへ来る前から、すでに病気だった。それを隠して、少女たちの世話をし、資金を得るために、昼間も夜も働いていた。なんども発作を起こしながら、彼女は入院をこぼんだ。その彼女が先週また倒れた。今は入院中なのだった。退院してくれば、いや面会謝絶の札がはずされれば、すぐ彼女は帰ってくるだろう。私たちは彼女がこの仕事に入るために別れたという、大阪からやって来た婚約者に彼女をたのみ、いそいでアパートをたたんだ。松本さんはお姉さんの経営している理髪店にいった。

私たちの情熱が消えたわけではない。しかし、このままいってどうなる。この仕事はもっと大きくなるかも知れない。しかし私たちまで成長するわけではない。おばあさんになって、もうセンターにいらなくなりながら、行き場がなくて、むかし私たちが働いてこれだけにしたんだと、しがみついているのは、あまりにもみつともない。

財団法人になれば、資金も来やすいし、よい奉仕者も来る。この際、私たちは解散して、自分たち自身を救おう。十年、あるいは二十年、それぞれの道を歩んで、そしてまだ私たちが必要だ

ったら、その時帰ろう。私たちもそのころは、もう少し太っているにちがいない。今は、人を救うどころではなかった。まず、私たち自身を救うこと、それがどんなにむずかしいことか、それを知るようになってきていた。もしかしたら、私たちは、自分自身さえ救えないから、そのごまかしに、こういう運動をしているのではないか。そんなことを思う日が、このごろ多くなったのである。

さて、一人になって、何をしよう。そう考えた時、学習院の国文科の学生で、別にこれといった技術も、才能も持たない私は、「会社に勤める」ということ以外、なかったのである。こんどは、自分のための職探しとなったわけであるが、その救うべき相手が、私自身であってみれば、これがいや、まことにむずかしかったのである。

国文科女子お断り

しばらくぶりで学校に行き、「求人」の掲示板の前に立った私は、思わず息をのんだ。九月も二十七日ともなれば、一流会社は全部締切りしめきりを過ぎていた。そればかりか、国文の女子に対する求人は、一般会社は全部アウト、締切りになったのもいれて、出版社が三社しかない。

出版社なら、私の入りたいと思う婦人文化社は、どこを探してもなかったし、せっかくカードのきている独創社は、女子お断りである。

一体これはどうしたワケか、締切りを過ぎてしまったのは、こちらが間抜け、文句をいうべき

